

シネマ日記



No. 69

○月×日 かつて在日コリアンたちの北朝鮮への「帰国事業」が行われていた。日本と北朝鮮との間では国交がないため、双方の赤十字が仲立ちして1959年末に最初の帰国船が新潟港を出航して以来、84年まで続いた。日本人妻やその子たちも含めて9万3340人が北朝鮮へ渡ったと噂だ。当時は北朝鮮のめざましい経済発展ぶりが喧伝され、衣食住に困らない「地上の楽園」などと伝えられ、多くの若者たちが未だ見たことのない祖国の建設に夢と希望を抱き、海を渡った。「かぞくのくに」のヤン・ヨンヒ監督自身、大阪で生まれ育った在日二世だが、3人の兄たちは20歳

きた国の違いから、妹の熱いまなざしとは対照的に言葉の少ない兄。兄は妹に情報提供者にならないかと誘い、激しく拒む妹。そして妹は、兄から一時も離れない北朝鮮からの監視員（ヤン・イクチュン）にも怒りをぶつける……。兄に脳腫瘍が見つかるが、1カ月の滞在では治療ができないと断る病院。そんなとき突然、何の理由も示されずに、帰国命令が下される。わずか1週間の滞在だった。近くても遠い両国、政治の非情、家族を引き裂く国家への怒り。父母、兄妹の一家の切なさが襲い、たまらなく悲しい。

○月×日 「ニッポンの嘘―報道写真家 福島菊次郎90歳」（長谷川三郎監督）は、今なお反原発デモや福島原発の立入禁止区域という最前線まで出向いて、かくしゃくと撮影を続ける現役カメラマンの主張と生き様を追ったドキュメンタリーだ。敗戦直後のヒロシマでの撮影に始まり、安保、三里塚、安田講堂、水俣ウーマンリブ、祝島等など、およそ権力との闘いがある

にもならない頃、その「帰国事業」で海峽を渡った。そうした自らの家族を題材に劇映画化したのが本作だ。彼女には同様の題材の優れたドキュメンタリーが2作ある。「ディア・ピョンヤン」（05年）は自らの家族の10年間を追い続け、大阪で共に暮らす朝鮮総連の活動にも熱心な父の姿や、ピョンヤンのアパートで暮らす3人の兄たちの家族にカメラを向けた。思想や価値観の違いを超えて、笑いや涙の中に、家族の絆が浮かび上がったし、続編の「愛しきソナ」（09年）も、兄たちと姪のソナの日常を追いながら、二つの国に分かれて暮らす切ない思いが胸を衝く。そうした思いの延長線上で描かれたのが、今回の作品。劇映画にすることに思いをよりストレートに表現したかったのだろう。

「かぞくのくに」は、16歳で北朝鮮に移住した兄（井浦新）が病氣治療のため、25年ぶりに帰ってきたところから始まる。ヤン・ヨンヒ監督の分身でもある妹（安藤サクラ）は幼児のとき以来の兄との再会だ。生きて

る場所にごとごとく足を運び、撮影を重ねてきた。映画は、福島が撮った多数の報道写真を挿入しているが、「問題が法を犯したものであれば、報道カメラマンは法を犯してもかまわない」と自身が言うように、いかなるときも反権力の側に立つてカメラを向ける。彼は「この国を攻撃しながら、この国から保護を受けることはできない」と、年金の受給も拒否する徹底さだ。真の反骨ぶりに、「ジャーナリストの魂、ここにあり」との清々しい思いに駆られ、頭が下がった。

○月×日 「おおかみこどもの雨と雪」（細田守監督）は、オオカミにも人にもなる姉弟の成長の物語。またデイズニーの「メリダとおそろしの森」は、太古の魔法が息づく森を舞台にした王女の冒険の物語。どちらも美しい大自然の生命力の躍動ぶりや、アニメならではのファンタジックな世界が素晴らしいし、勇気や優しさの大切さに改めて感動させられる。

（内藤 哲）